



口腔外科手術体験記

— 中 —

専門医も首をひねった右顎の塊。取り出すまで正体は分からなかったが、できた過程は術前のある程度つかめた。記者(四〇)の実家近くの矯正歯科医院に、小学生の頃から定期的に撮っていた口内のエックス線写真が残っていたからだ。

主治医となった愛知学院大歯学部付属病院(名古屋市中種区)の口腔外科専門医、長谷川正午さん(五〇)が写真を調べたところ、塊が写りだしたのは二十代後半。それから少しずつ大きくなり、周辺組織を圧迫して痛みを起こしていた。成長の状況が目を確認できたからこそ、私は切除手術に踏み切ることができた。エックス写真の保存期間は一般的に二〜三年。四半世紀以上も残してくれていた医院には感謝しかない。

手術の方法も、長谷川さんが模型を使って丁寧に説明し

初めての全身麻酔

てくれた。人生初の全身麻酔。顔に手術痕を残さないよう、口の中を数センチ開けて塊に到達する。ただ、顔の外から行うより難しく、塊の手前にある骨「筋突起」を折る必要もあるそう。不安に駆られたが、「口を開閉する筋肉は複数あるので、折っても影響は少ない」と長谷川さん。後はベテランの腕を信じることにした。

新型コロナウイルス下の昨年六月、PCR検査を受けた上で手術前日入院。感染予防のため面会は禁止だった。その日の夕食は白身魚の甘酢あんかけ。「しばらくは固形物を口にできなくなる」と、



模型で位置を示しながら手術を振り返る長谷川さん(名古屋市中種区)

昔のX線写真 決断後押し

一人で痛む顎をかみしめて味わった。

翌日、予定より一時間早い午前五時半に目が覚めた。ひどい寝汗。同九時に看護師と一緒に歩いて手術室へ。手術台におおむけになると、アツプテンポの洋楽が流れていて緊張が少し和らいだ。横には、執刀医の長谷川さん。塊

の第一発見者の口腔外科医、佐々木惇さん(三〇)も現在勤務する病院から補助に駆けつけてくれた。信頼する二人のマスク越しのほほ笑みに、気持ち落ち着いた。

手術は予定通り二時間半ほどで終了。高度治療室から夕方には病室に移る予定だったが、だるさと吐き気で起き上

がれず、戻ったのは午後八時すぎ。スマートフォンを見ると、夫からの安否確認メールがたまっていた。「無事終わりました」と返し、すぐ眠った。食事も着替えも、年長児だった長女と約束していたテレビ電話もできなかった。

(白井春菜、次回は九月一日)